平成２８年度 第１回 市史編さん委員会 会議録　〔要録〕

会議名称　　平成２８年度 第１回 市史編さん委員会
開 催 日　　平成２８年８月９日（火） 午後１時３５分～２時４５分
会　　場　　佐倉市役所３階会議室
出 席 者　　市史編さん委員
利根基文委員長　堀越正行委員　白土貞夫委員
中澤惠子委員　内田儀久委員　岩淵令治委員
事務局　須合文博行政管理課長　土佐博文副主幹　江森幹浩主査
記録作成　　江森幹浩

会　議　内　容

会　　議

【議題１】『佐倉市史料叢書　古今佐倉真佐子』の刊行について

〔事務局〕
『佐倉市史料叢書　古今佐倉真佐子』の刊行について説明。現在は翻刻文と原本の照合がほぼ終了。菅原憲二氏（千葉大学名誉教授）執筆の解題と索引を加えて今年度刊行予定。付図の「佐倉御城府内之図」写真版も同時に刊行。

〔岩淵委員〕
叢書の一冊目に「古今佐倉真佐子」が刊行されるのは非常に喜ばしい。詳細な翻刻であり、地域にも学術的にも資するところが大きい。
口絵の２頁はどのような写真を掲載するのか。また、「佐倉御城府内之図」はどのような形態か。

〔事務局〕
口絵の写真は、表紙と見開きで。掲載は図が掲載されている箇所にするか検討中。「古今佐倉真佐子」は市指定文化財ということで昨年修復を行ったので、修復後の写真を掲載する。「佐倉御城府内之図」の写真版は、これまでに刊行した「城絵図」が古い印刷のため鮮明でない部分があり、修正しつつ、形態はこれまで同様に１枚ものを考えている。原寸よりやや小さく、折りたたんで封筒に入れて添付する形を考えている。

〔堀越委員〕
これは市販されるのか。市民と一緒に読み下して活用するような活動に結び付けて、今後製作されるものも含めて、市民に佐倉のことを身近に感じていただく方策を検討して頂くことを希望する。

〔事務局〕
市史編さん担当が事業を行うのではなく、公民館の活動、教育委員会の活動において、正確な活字を提供することでその後に結び付けていくことを、他部署と連携しながら進めて行きたいと考えている。

〔白土委員〕
解題の原稿は完成しているのか。解題の分量は。

〔事務局〕
まだ完成していない。８千字程度でお願いしている。

〔中澤委員〕
字の大きさは配布資料と同じものになるのか。最近はもう少し大きくする動きがあるので検討して頂きたい。

〔事務局〕
印刷を進めるなかで検討していく。

〔内田委員〕
公民館で活用することを考えたい。数年前、外山先生を講師として、読了まで１３回程度の講座を行った。最終回には関係箇所を歩いた。だいたい１年くらいかかる。３，４年続けて開講し、毎年満員になった。待ち望まれた本だと思う。鏑木先生からも講座の提案があり、使用したい講師が他にもいると思われる。

〔事務局〕
外山先生からも正確な翻刻が欲しい旨の希望があった。よい機会だと思う。

〔堀越委員〕
ルビの小ささが限界に感じる。もう少し大きくした方がよいと思う。

〔事務局〕
十分検討していく。

〔白土委員〕
一般のかたに関心を持ってもらうには、現代語訳が必要ではないか。解題で解説をして頂けると思うが、関心を持っても読み下せない人も多いと思う。私見としては現代語訳が欲しいと思う。

〔事務局〕
今回は活字化したものを作成し、その次の段階かと思う。市史編さん担当でやるのではなく、取組む人が出てくるかと思う。

〔堀越委員〕
講座等で読み下したものを、自分たちでまとめて出版するという動きもあるかもしれない。

〔事務局〕
現時点でも中央公民館の市民カレッジ生で取組んでいる人がいて、編さん室に原本の写真を確認に来る事がある。

〔内田委員〕
市民カレッジの卒業論文にこれを取り上げている人がいて、現代語訳に取組んでいる人も何人かいる。

〔委員長〕
市史編さん担当で直ちに現代語訳を出すということにはならないと思うが、決定版を作るのか市民の活動に委ねるのか今後の検討となる。今年度は、頂戴した意見を参考として、『佐倉市史料叢書　古今佐倉真佐子』の年度末の刊行にむけて事業を進めさせて頂く、ということでご承認を頂いてよろしいか。

―異議なし―

【議題２】『佐倉市史料叢書』（平成２８年度～３５年度）の刊行計画と体制について

〔事務局〕
『佐倉市史料叢書』の刊行について事務局案を説明。重要史料と考えた近世史料４点、近現代史料４点を提示する。刊行の基本方針は、平成２６年度の市史編さん委員会でご了承いただいているが、１冊につき２年間をかけ、近世史料と近現代史料を交互にとりあげ、１年につき１冊を刊行する。今後の史料調査で重要な史料が発見された場合は随時検討する。
『佐倉市史料叢書』の刊行は専門性が高い事業となる。基本的には近世史料・近現代史料が中心であり、近世史がご専門の岩淵委員、近現代史がご専門の中澤委員にご協力・ご助言を頂きながら事業を進めていきたい。具体的には史料選定にあたっての意見、筆耕・翻刻者の紹介、解題等に適した執筆者の紹介等、事務局の相談にのって頂きたい。

〔岩淵委員〕
委員会でご承認頂ければ協力させて頂く。近世史料の４点について、最初に『古今佐倉真佐子』という地誌が刊行され市民に有用であること、『佐倉古名鑑』は、武士について藩士の子孫からの問い合わせが多くニーズが高いこと、『御医師日記』は、医史・文化面について佐倉は蘭学が有名であること、『印旛郡青菅村名主日記』は百姓の日記であるが、近年、個人史への関心が高くなっていることなど、地域への還元と学会の関心との両方を満たすバランスのとれた選定である。
近世・近代を隔年で刊行していく精力的な計画は素晴らしいと思うが、実際の体制として、史料の筆耕・翻刻はアルバイトや外注で行うとしても、最終的な確認作業、原本照合、索引の作成など、事務局の負担が大きいと思われる。『古今佐倉真佐子』は放送大学の協力を得られたが、今後は人の確保が厳しく事務局の負担がかなり重くなると考えられるので、非常勤であっても常駐してこの仕事に携れる人の確保が必要になってくると思う。そういった体制の見通しはいかがか。

〔事務局〕
古文書を読むことについては市民のサークルなどもある。その後の作業については専門的なかたを確保したいところだが、実際には難しい面もあり今後の課題である。

〔中澤委員〕
近現代の４点の史料について、『帝国在郷軍人会佐倉町分会歴史』は、結成から最後まで全て残っており、非常に貴重であり大賛成である。『旧町村事務報告』は、佐倉市合併前の旧町村の役場文書が均一に残されていない状況の中で基本となる史料である。これまでは発掘されておらず虫食い状態だがこれから出てくる可能性もあり、その際には次の機会を作ることに繋げてほしい。町村会の議員をなさったお宅から出てくることが度々あり、そこに留意しながら今後も調査を続けてほしい。『但馬鑒之丞日記』

は、非常に几帳面な執筆者によるものであるが、扱いが難しい部分がある。日常的、個人的な記述もあり、全部を出す事の可否は検討する必要がある。『村会雑俎』は、議員をなさったかたの記録なので、個人的な日記とは違って、町村の状態を知る事ができる貴重な史料である。
岩淵先生と同様、せっかくたてた計画を実施して実績を作っていくことが必要だと思うが、事務局の体制が非常に心配である。順次刊行していくのであればよいが、同時並行となると人数が必要となる。正職員を増やすことが難しいのであれば、非常勤として、古文書が読めるかたに限らず編集作業を手伝っていただけるかたなど、人の配置を考える必要がある。良い企画をたてても、最初からずれていくと、継続的な事業にならないのではないかと心配である。計画では今年度から近現代の翻刻を始めなくてはいけない。筆耕は外部のかたが行うにしても、それは入口であって、実際にはそれからが大変なので、検討が必要である。

〔事務局〕
筆耕した後の処理は時間も手間もかかることであり、増員の希望はある。

〔岩淵委員〕
繰り返しになるが、中澤先生もおっしゃられたように、原稿が出来た後の統一、原稿整理はかなり膨大な作業量で、刊行する巻と次の巻の準備を並行して担っていくのは相当大変な作業量になる。常勤が望ましいが、非常勤であっても予算要求をあげて頂いた方がよいと思う。

〔白土委員〕
市史巻４の編集の際に、但馬日記は印象に残っている。明治時代の記述は箇条書きで目新しいこともなかったが、昭和１８～２０年は真に素晴らしい。市史研究にも引用しながら当時の世相を寄稿したが、戦時中の市民生活が大変だった時に米の闇値があがったなどはどこの市史にも書いてある。具体的にその地域の値段がいくらになったのか、どんなものが配給になったのかといった具体的な記述は、他の市町村史には見られないが、この日記にはそれが非常に克明に書いてある。戦中史として、その部分だけでも全国的にも貴重な史料ではないかと思う。私としては、順番を入れ替えて頂いて、もう少し早く刊行して頂ければと思う。明治３０年代から終戦までの非常に長い年月の日記であり、どの時期を選ぶのかということも大切だと思う。

〔事務局〕
刊行順は臨機応変に考えていこうと考えている。

〔中澤委員〕
日記の扱いかたは非常に難しい。特に但馬氏は家族の記述が多い。ご家族、親戚のつながりの扱い方は非常に難しく、今となれば何ともないことであっても、個人的なつながりが書いてあり、「市史」の時は人名を伏せ、史料集のときには伝染病のことなど個人的なことは問題があるので、地域と名前を伏せて、Ａ，Ｂなどと表記した。そのような方策に堪えられる史料か。但馬日記は人物がたいへん多く、それをＡ，Ｂとしていくのか。日記の扱いについてはもう少しきちんとした方針を検討する必要がある。近代の日記の扱いについては、気をつけすぎることはないと考える。貴重な史料なのでもったいないが、もう少し方向性を考えた方がよいと思う。

〔白土委員〕
但馬氏の場合、戦時中は３世帯が同居しており、市史研究に寄稿した際にはＡ，Ｂ，Ｃで個人名を一切出さなかったが、最後にはアルファベットが足りないくらい登場する。日記は人に見せるものではなく

個人的なことが様々に書いてあるので、その辺りが難しい。史料としては第一級のものだと思う。

〔岩淵委員〕
近世の場合、私用の日記であっても個人が伏せてあるものはあまり見た事はない。あるとすれば被差別の関係だが、そのまま翻刻した日記もあって、そのあたりは十分に吟味したと思うが、一般的に、百姓や町人の日記は、私用と公用がきれいにわかれていないものもあり、伏せるということはあまりないと思う。

〔白土委員〕
「市史研究」に志津半家の日記を使わせて頂いた。志津氏が全面に出てくるが、公人的であり相手も比較的に公人であったので、やりやすかった。

〔中澤委員〕
この委員会でも日記の扱いを十分に検討して、伏せるのか、伏せなくてもいい場所を抄録とするのか、叢書の中でそういったことを扱えるのか検討していく必要がある。

〔岩淵委員〕
他の自治体での私的な日記の翻刻の事例について情報を集めた方がよいと思う。

〔中澤委員〕
県史でも日記は出しているが抄録としている。県史として一般の史料がたくさん掲載されている中なので抄録でも構わないと思うが、叢書にしてひとつの史料として出そうとしているときに飛び飛びの抄録となると少し問題があるように思う。

〔岩淵委員〕
研究的には銃後の社会史という話で、戦地に行った人の日記だけではなくという研究はあると思うが、研究資料としてではなく翻刻史料として全文を出しているものがあるかという確認が必要。

〔中澤委員〕
史料集に載せる場合、どの分野で出すかということによって、目をつける場所、内容が違ってくる。刊行の趣旨と今回の「叢書」とはすこし違うように思う。そのあたりを検討する必要がある。

〔委員長〕
日記については検討すべき事項があるというお話を頂いたので、方針についてはこの委員会を活用させて頂いて、相談をしながら進めていくことにする。

〔岩淵委員〕
叢書の活用について、現代語訳本を出すのはなかなか大変な作業であり、今回は基本的に史料を起こすということでよろしいと思うが、活用という点では、先ほど公民館活動での活用という話もあったが、刊行ごとに、その翌年にこの史料を使ってこんなことがわかる、といったレクチャー、講演会が開かれれば活用の弾みになるのではないか。その可能性は検討して頂きたい。

〔白土委員〕
発刊直後は講演会や勉強会が開かれるとしても、今後、史料が残ることになる。今まで目に触れなかっ

たが活字になれば関心がある人も今後増えていくのではないか。刊行直後に研修を受けた人はわかると思うが、その先を考えると、現代語訳があった方が一般の人が親しんで頂く役には立つのではないかと思う。

〔中澤委員〕
叢書の刊行にあたっては、中身を理解する大きな役割はあるが、活字として残しておくという役割もある、ということで承認されたと記憶している。現代語訳については史料ごとに検討するという課題を残しておいてはどうか。例えば、漢詩・漢文にようなものが出てきたら現代語訳をつけるなど、史料によって考える。

〔事務局〕
叢書を出す意味は、未刊の史料を活字化して一般のかたに知って頂くのと活用のふたつがある。現代語訳は活用の部類に入ると思う。それを市史編さん担当でやるのか別の部署で行うのか、今後、十分に検討していく。

〔白土委員〕
現代語訳を市史研究に掲載していってはどうか。

〔委員長〕
マンパワーの点でご心配頂いているところで、やらなければいけない事は山積している状態。何かできるのか、３６年度以後なのかよくわからないが、課題としては認識しておく必要がある。
議題２については様々なご意見を頂戴したが、基本的には事務局より提案のあった長期計画については、頂いたご意見を反映させながら進めていく、という方向でご承認いただけるか。

―異議なし―

〔委員長〕
以上を持ちまして本日の会議を終了します。長時間にわたりご審議ありがとうございました。